



西の
山
崎
の
文
庫

中村俊定文庫
文庫 18
996
1





御治小諷諫の道あり事

一諷諫の事 家語孔子曰忠臣諫君有五義 一曰諷諫
 二曰顔諫 三曰降諫 四曰直諫 五曰諷諫 諫よりスツル
 孔子云を諷諫は人よのむ小諷諫と云ふは虚無に
 理を以てしつゝ人よのむを以てしつゝ人よのむ
 毎つてくつゝ人よのむを以てしつゝ人よのむ
 一禁是れも西より十里、信より一里、御治と云ふは
 遊戯と云ふは、家語を改め十四、いふは、家語を改め、



ら

一 達磨とて世に... 櫻御殿と云ふ所...

一 法皇とて御... 御座りし...

一 法皇の院... 御座りし... 御座りし...

よしや神心は... 水の音

一 此の世... 御座りし...

一 家の神... 水の音... 御座りし...

一 例の如く〜の如く〜は〜ある様に〜
 の文法も〜も〜
 一 例の如く〜の如く〜
 一 例の如く〜の如く〜

一 例の如く〜の如く〜
 一 例の如く〜の如く〜
 一 例の如く〜の如く〜

一 例の如く〜の如く〜

一 例の如く〜の如く〜
 一 例の如く〜の如く〜
 一 例の如く〜の如く〜

一 例の如く〜の如く〜

一 姿音情後ハ中のおしこ情あ姿後連歌の事
方ゆきし十句し十句しあふ屋し
こし

そはけく後古主人輝かきりく

いろくの事ありひあふこし

後しの

あはけあはけ

あはけ

物うきしのおしと目のあふあふ

いりあふあはけ

六義ニ今ノ和訓之事

一 風

本文凡言ト訓スヘシ和歌ニツハ歌ト訓タレト
比奥ニ字ニマキラハシト又論言凡是百世ノ
明監ヲ待ヘシト
麥林云古實ノコトク副歌可然ト

一 風ハ六義ノ小體六義ノ長也五義凡ニ凡ナツハサレハ
文ニアラス詩ノ風凡トハ遠ヘリ

一 凡ハ文通ノ卷頭也又文道ハ邪正善惡ヲ分ツ貫道
ノ器也又婦ノ情ヲ知り武士ヲ和ラケ鬼神ヲ感セシ
ムルモ凡ノ源クカクレテ言外句外ニ感アルヨリ萬物ヲ
動シテ佛神モ應アル也

一 天地ニ凡ナケレハ二義萬物トノハス人ニハ息凡也文道
モ凡ズルニアラサレハ文ニアラス

一七情ヲ情ノハニ云ハ凡ニアラス其情ヲ其家のナアラ
ハシテ其情ヲシラシムルヲ凡ト云フ

定家ハ日月ノ源ノ流ルル中畧切ノ對ニカキテ
あつてそののこせぬをうまうまの者あつて

一 此ノ事ヲ 古今集

弘治トハ
天下ヲ云

強ハ流ルルニシテ花をさす
わが心もくもくわが心もく

是ハ王仁ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ
花ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
その事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ

二年宮位ありて其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ

一 昔の御代より今までの御代まで其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ

是ハ代官の事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ

是ハ代官の事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ
其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ其の事ハ人ノ事ニシテ

一 雅ハ正也風ハ直也雅ノ端的モナケレハナラヌ物也

然ルヲソレヲ和ラケテ云フ風ト云フ風ハ温和ニ雅ハ
厲シ凡直ナレトモ雅ニアラサレハ正サス此故ニ剛也
柔颯相交ク風雅互ニシテ文ヲナシ正道ヲトナフ
一凡雅ハ正直ヲモテ本トス雅ハ懲惡凡ハ勸善ト云
フ正ハ心ノ躰ノ正シキヲ云ヒ直ハ情ノ用ノ直ナルヲ云
也此中ヨリ出ルカ神道ノ中極ナリ儒ノ中備也佛ノ
中道也

古今集雅の神の歌

ふきくあへきまをいふ

むちりくく風をいふ

よのよのときすうすうかむむのよのよの
る雅のよのよ

雅あうううあさうあさのあさ

雅のよのよの神をいふ
ほろあううあ

あはのよのよのあはのあはの
雅

あはのよのよのあはのあはのあはのあはのあはのあはの
あはのあはのあはのあはのあはのあはのあはのあはのあはの

一頌ハ祝歌也奉納家後祝言イ守行しん後せんり

ニ申ル也頌ハ文章ノ專トスル處ナリ佛神ヨリ
君父ノ徳ヲ賛シテ一切物ヲ祝スルノ情ナリ

一頌ハ昔々ノ讃嘆也

古今集の序
よのよのよのよのよのよの

くらとより美しきものなり

巻頭の書向に

人よふは我をよむと云ふ事なき

海にさのこしあつたのゆゑに

又伊勢神は東よ西のそびえりて

公のゆれ危ともあつた白ひび

石風雅頌ノ云ハ皆ナリ賦比興ノ云ハ言をふ也

一 賦ハ文章ノ惣名也凡テ賦ハ趣向カ用ナリ一ウニ

趣向ニツモニツモアリ引物連類也賦ハ文の要ト云

也也物ヲシキナラヘタルカ如シ

かきく歌 古今集序

さしつらあつしなむのめちさあさ

あつしつらあつしなむのめちさあさ

巻頭の書向に

あつしつらあつしなむのめちさあさ

一 比ハ并ナリタトヘ寄ナリナツラヘ歌ナリ物ヲトツ

テ其姿ニナツラフモノニ準ル其事ヲシラシム物ニ

タトヘテカクコトシト云フカコトシ

かきく歌 古今集序

あつしつらあつしなむのめちさあさ

あつしつらあつしなむのめちさあさ

あつしつらあつしなむのめちさあさ

あつしつらあつしなむのめちさあさ

あつしつらあつしなむのめちさあさ

十六物や何れも其のまゝの圖

一眞ハ物ヲ物ニタトヘテ心ヨク高シ貴ク強シト云カ
如レ比ハモノニタトヘテカクノ如シト云フ眞ハタトヘテ
トリテ彼ヨリハ是ハマサレリト云作り分ル事也
我慈心ハヨムトモツキシノ多ク我鬼ヒノカス〜眞
砂ニタトヘ眞砂ハカツハツクストモ我慈ノカス
〜ハツキシトタトヘテ分ル也一眞ニツアリツ
右ノ眞也又遊眞ノ興ニシテモシロコノ許今
一ツアリ本文眞ノ躰ナリ

ふも〜しんは〜り〜の

〜の〜の〜の〜の

る眞ノ名ハ

お〜り〜言〜や〜ん〜の〜

眞眞お〜り〜の〜

物〜多〜もの〜の〜の〜

凡六義ハ人ニ五臟アリテ五行ノ元相交リ相通
シテ性命アルカコトシ故ニ貫之モ六種ニハ得ワ
レスト云リ六義寄リ合テ文章ヲナス然レトモ
凡ノ多キハ風トシ眞ノ多キハ眞ノ勻トス何レモソ
ノ主トスル多クモテ躰トセリ

一口授平生言語ニ云フコト皆六義ノ外ニ出テス或ハ
人ニ答フルニ凡ク以テ人ヲサトシ或ハ雅ノ言ヲ出
テ判断シ頌ニ讃メ比トタトヘ或ハ賦ニカス〜ナ

へ真ニ差別シ其言ニ其事ヲ調フルノ類六
義ニ七九ノ事ナシ

切ニ之段の善事あらん事

じの押向連歌ニ事

花鳥風月やそん知れ意

同連歌ニ事

おあ人きまの心見

あふみの事

あふみの事

同ニ事

この世の事

うらな

蛤ノ浮勢ハうらな也

梅花卿

お歌チケル事ハあはれ也

梅花卿

花鳥風月やそん知れ意

世にわらわの心

河ノ瀬ニ事

うらな

うらな

石ノ事

うらな

右ノ事

うらな

じの連歌ニ事

梅花卿

八月の峰の如月を水

しづの細路の風を

おまの、庭のゆく鉄石に

あふあふの風を

月一をそよひちりて初経

素中

あふあふの風を

昔の如くともあふちりて

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

二月の如くともあふちりて

夕あふあふの風を

夕あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

あふあふの風を

江戸のあしをなすもさきさき清き名
 切のちびるもさきさき清き名
 清き名

一 江戸切 江戸切 江戸切

清き名
 江戸切

江戸切の清き名
 江戸切の清き名
 江戸切の清き名

江戸切の清き名
 江戸切の清き名

江戸切の清き名
 江戸切の清き名

田

江戸切の清き名
 江戸切の清き名

江戸切の清き名

江戸切の清き名
 江戸切の清き名

わびしき〜の風の国木の海〜の東〜身〜
〜の乃田〜の枚極は〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜

え〜の海〜の海〜の海〜
細帯〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜
〜の海〜

幽情

〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜

〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜

一切

〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜

〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜

遊善塔
〜の海〜の海〜の海〜
〜の海〜の海〜

一 吾漁場 あるもこの世は如何なるに後

みも一也一なるのみならず一なりとも其と一も一もを
決して一を一を一も一もは地あり

凡て如斯神とあり地とあり也よ一也一のののの

一 雙園 中を直に申れ地や雄雄の事

申の二と云ふことなればと一も一も一も一も一も一も
とそゆれ一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も

一 影思 影思よ一も一も一も一も一も一も一も一も一も

一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も
て一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も

月夜と云ふ事や

一 裁入 裁入の外に餘地ある、葉の口

古のののを裁入と申す一も一も一も一も一も一も一も一も

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

一 裁入 裁入の外に餘地ある、葉の口

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

裁入は裁入の外に餘地ある、葉の口

一 裁入 裁入の外に餘地ある、葉の口

少くもしつち被れ所と用とをさすもの

一 五照 水化やあき後子れ共共なる

あきの月ちりしる高き物の光 なる

一 尊昭 中しよれしるまのかりんそ

月とめてあなんちるま

まきりしる人交れしる月

あきるち被れしるちるの胎とるの被れ

ふちりしるちるちるの被れしるちる

この被れちるの月人しる人交れしる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

あきりにちるちるちるちる

一 巾文 巾背しるちるちるちる

まきりしるちるちるちるちる

一 十七の字れちるちるちるちる十八のちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

ちるちるちるちるちるちるちるちる

おもひくちれき程なるあそび例しく情の切
とよしくあつかりしあそびと合はれぬ家
家の切とよむ切字とよむた
神楽の曲に人節無切也曲節あつた
少き魚しとよむ曲節あつた

程なる日わさむしその名とよむ情の切とよむ
れ文りて情を切とよむし程の切とよむ
文りて情の切とよむし程の切とよむ

し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ
のちとよむし程の切とよむ

し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ

し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ

し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ
し程の切とよむし程の切とよむ

あはれ心物しつとん

一 中切 猫のあやし時周の朧月

○未鴨詩 猫のあやし時とまをまうて朧月のまほ

○号鬼啼未 春寂實楚 竟吟後月 朧朧

くまのけりあらしとれさふら取所とれさあ

くちくちとてふまのち取りまふふん

くちくちとてふま

○未鴨詩 爰御出ニ行ニ七字

中切 ちりしとちししと月の中

○賈島詩 やましと山しときまをちりしと

○流星透疎 木走月逆 行雲 風あをさしとてふまのち取りまふふん

の中切のちまをさふのち取り

○賈島詩 爰御出ニ行ニ五字

一 中切 せをちりしとちりしと

あがり脚置換をちりしとちりしと

あとしとちりしとちりしと

あらしとちりしとちりしと

あらしとちりしとちりしと

あらしとちりしとちりしと

あらし

一 中切 ちりしとちりしと

ちりしとちりしとちりしと

ちりしとちりしとちりしと

ちりし

あらしとちりしとちりしと

あらしとちりしとちりしと

下に大層しつゝさういふ言はなすれあつた曲の
のまじりあつたのころとちがひはらうか

二折小曲組の事

一 折 八小曲とさういふはまうまはつた
世にありはらうとあつたやうな書は「月夜
の儀式まへ」種彦と河合。こゝと組の比は
あつた

一 折 本地と部れ種彦の場。一 折 儀式れ
らに解くことゝあつた

一 折 さまと御路のあつた。例の曲組とさ
ういふ名は「名」は曲まうしつゝあつた書は物の
まへにうれまうとさういふは「御路」とさういふは比

のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
一 折 小曲の比のあつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

一 曲 節と曲まうはあつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

一 折 小曲の比のあつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

花の影を〜 海向しからる神

花の影を〜 海向しからる神

花の影を〜 海向しからる神

花の影を〜 海向しからる神

~~~~~

### 花の影

花の影を〜 海向しからる神

~~~~~

~~~~~

花の影を〜 海向しからる神

~~~~~

~~~~~

~~~~~


一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

月とすく

花の葉のふきかた

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

一 花の葉のふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは
よのふきかたをよむはゆふのふきかたをよむは

八月、藤原のうらさしコブクマシの中

赤いともなとも丹の赤なかにあけなれどまのなる目か月

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

一 月の赤さをうらさし丹の赤もあせもあせ

とくもものむにまよふもけいもくまを月あり

まのこももももももももももももももももも

いももももももももももももももももも

一 丹の赤さをうらさし丹の赤もあせもあせ

あせ

一 丹の赤さをうらさし丹の赤もあせもあせ

丹の赤さをうらさし丹の赤もあせもあせ

丹の赤さをうらさし丹の赤もあせもあせ

八月、藤原のうらさし

赤いともなとも丹の赤なかにあけなれどまのなる目か月

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

八月、藤原のうらさし

赤いともなとも丹の赤なかにあけなれどまのなる目か月

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

赤の月をうらさし丹の赤もあせもあせ

好律もとく人の知れどもさるる
 音とてもなり也

月れたるふ徳の申し物文ふむあ

親式は帝し華ゆれ申

一 喜一取し徳をのこしとてさし入る白れ光

しふる

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 服をさるるにさるるぬ華白くして申し人の徳をいふ
 一 服のさるるとして申し人の徳をいふ
 一 服のさるるとして申し人の徳をいふ
 一 服のさるるとして申し人の徳をいふ
 一 服のさるるとして申し人の徳をいふ

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

一 白くは光新しとある事しきを新やとて白く
 の光を申しと也

諸般願仕の法縁碑の法とも云ふむぢやうとあり

ぢやうの法縁の法縁に就てん

のちやぢやうらんを月々の助

いふうとありてあるは其の法縁を承例とて

の法縁を承例といふに曰く 昔編録縁縁の

あり

心いふまゝの事

よの白くもれりていふに法に下れりてあり

ありていふにありていふにありていふにあり

ありていふにありていふにありていふにあり

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

心いふまゝの事

おのれはふとてくつ白きし

くつ白きしつゆ年れはのあちちち

これに振るひられしを

かみまじりて起情やはれしはのあちちち

くつ白きしつゆ年れはのあちちち

向次又ちんげのち名しは白地のそふあひて
おと水しげふ

大名あれと産るぬる東

七借きたる人よはれし

大名し七借をりしはかかれしはあひ
かかれしあひしはあひ

場所はちんげのち名しは白地のそふあひて

きしじのほかくれは

起向し白き

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

あひしはちんげのち名しは白地のそふあひて

曲を地のはらあつてあつてあつて

一 此の曲は法皇の曲であつて、昔は、
この曲は法皇の曲であつて、昔は、

辛海に、此の秋、

春の秋、
新

古今七名の所

七名

一 此の曲は、昔の曲であつて、昔は、
と云ふ

今も、昔も、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、
と云ふ

一 昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

一 昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

昔の曲は、昔の曲であつて、昔は、

と云ふ

・空境 野白のこゝろ ちりぢりなうたげにみえ
あつちのこゝろ

障子こに紙のたるこは

紙半取ことれとよのひを越へ

初筆ととも人のこゝろのたけり紙ととも人の

紙切トス

・八作と紙やと名をいふは 海も東も西も
多七名や

・八折にあつては 物もこゝろもあふれぬ
一人あつては 居しれは八折のあつたも
高にともあつたも ぬれぬととも

八折證り

北風拂ふまの 中り地

主人 ぬれぬ一人は ぬれぬ一人は

高鳴

主病 ぬれぬ一人は ぬれぬ一人は

以分 龍のまゝに ぬれぬ一人は

以色 ちやのせふと ぬれぬ一人は

以名 水の中を ぬれぬ一人は

以相 ぬれぬ一人は ぬれぬ一人は

以相 ぬれぬ一人は ぬれぬ一人は

以相 ぬれぬ一人は ぬれぬ一人は

・七名證り

まねもはらふと ぬれぬ一人は

まねもはらふと ぬれぬ一人は

高鳴

今欵 新ハおこくアヤヨ。何ヤシ
逐ク 癖のせやハ 福シキニケテ
石之法

分此 想のよとミヨク 調子
物子 今魚ミミ何ト 端のし
子ミ 今ハミツクニ 今ハミツクニ
起悟 アハレハ 持心ミツクニ 悟
起悟 甲の和 勝心ニ 今ハミツクニ
分

一 伊曾レ音ハ例の仕ハ 奉仰ミテ六ノ息の理ハあり
レミトミツクニ

お尋のあハミ 今ハミ 今ハミ
一 今ハ他のの連平ニ 難而曰 御まハレ 連平也
と論ハミ 妙ハ 妙ハ 妙ハ 妙ハ 妙ハ 妙ハ
今ハミ 連平ニ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ
と今ハレハ 悟ルニ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ
それハ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ
のち後ハ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ 今ハミ
悟也

一 和欵ミテ今ハ 連欵ニケテ 今ハミ 今ハミ 今ハミ
連平ニ 今ハミ 今ハミ 今ハミ

秋風の音はさかづき 夕アアア 秋夜

秋風の音はさかづき 夕アアア 暮

いづち平秋風はさかづき 夕アアア 暮

一 他のおよびの音はさかづき 夕アアア 暮

うらやまの音はさかづき 夕アアア 暮

~~~~~ 秋風はさかづき 夕アアア 暮

秋風の音はさかづき  
或はさかづき

月 峰の音はさかづき 夕アアア 暮

~~~~~  
~~~~~

秋 音はさかづき 夕アアア 暮  
残 境の音はさかづき 夕アアア 暮  
北 音はさかづき 夕アアア 暮  
奥 音はさかづき 夕アアア 暮  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

言切	柱のぬらうもあやうれせ所の塔	とん
二言切	浄土のしんもあやうれせ所の塔	とん
三言切	能神も浄土のしんもあやうれせ所の塔	とん
四言切	今年竹葉もあやうれせ所の塔	とん
五言切	昔もあやうれせ所の塔	とん
六言切	月もあやうれせ所の塔	とん
七言切	竹もあやうれせ所の塔	とん
八言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
九言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十一言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十二言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十三言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十四言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十五言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十六言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十七言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十八言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
十九言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん
二十言切	竹葉もあやうれせ所の塔	とん

ちと 立田山ぬじもあやうれせ所の塔
 北字 並つや 秋もあやうれせ所の塔
 押字 流かゝるもあやうれせ所の塔
 三言切 秋のしんもあやうれせ所の塔
 少切 竹葉のしんもあやうれせ所の塔
 力傍切 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 且與切 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 全圖切 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 五言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 六言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 七言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 八言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 九言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十一言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十二言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十三言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十四言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十五言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十六言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十七言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十八言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 十九言 浄土のしんもあやうれせ所の塔
 二十言 浄土のしんもあやうれせ所の塔

一 曲中三を讀むは意の深奥に達する
 一 名門を修むは亦小修に非ざるべし
 一 此の七を修むは中一を修むるに非ざるべし
 一 此中の曲を讀むは若くは各問集なり

明神宗法説用書終

仙遊の道とまろり事

或人問曰仙遊の何の爲にまろり事や 答曰法法宗法成
 せし人なり爲あり又問仙遊の道とまろり事何又
 答佛及小達とあり 佛道小達とありはも亦あり
 ありとまろり事小通ひとるなりあり及理ありれ
 ども仙遊のすくくは身建致の成ふまろり事と向
 の一語小まろり事と
口傳ニ一向宗門
ノ変アリ

仙遊二子一車

仙遊の二子一車とありは亦一車とあり或は二子書成り
 仙遊の二子一車とありは亦一車とあり或は二子書成り
 小まろり事ありは亦一車とあり或は二子書成り

古今集より此の字の成りし事いふれば此類の故無
く由法をも通す小用ありともあるをむしを御抄也
此語と此語との二種あるれども我家の此語小
古人ありし者被りて宗昭の宗主とも妙とも名
別小くもむし節れと云語小成りし心不の理を
いふの事小今より此語の二字もあらずし地
門小討しつゝ窮賢をも為りし事
口傳ニ埋本ノ
更アリ

虚無の事

あ切の虚小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
うも美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
うも美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
うも美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
うも美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
うも美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く

詩歌連此と云ふものの上の小うも成りし事也虚小
毎も美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
毎も美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
毎も美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
毎も美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く
毎も美小成りて美小徹く美小成りて虚小徹く

愛化の事

文章と云ふも愛化の事也文章の自在成り
文章の自在成り文章の自在成り文章の自在成り
文章の自在成り文章の自在成り文章の自在成り
文章の自在成り文章の自在成り文章の自在成り
文章の自在成り文章の自在成り文章の自在成り
文章の自在成り文章の自在成り文章の自在成り

美談林その愛化あつては日光の風情ふりも
もれあれは節句の句少愛化あつては事化の愛
化あつても愛化ももるもるもるもるもるもる
小進ひあ後の愛化あつては事化あつては事化
とそふ小新古あつては事化あつては事化あつ
りては事化あつては事化あつては事化あつて
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
うては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ

起之轉合之事

あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ
あつては事化あつては事化あつては事化あつ

發句小切字らる事

發句の切字とては差別のゆやおそれとやんら
とては事化あつては事化あつては事化あつ
差別之又同春の事とては事化あつては事化あつ
んのとれぬ的は發句小切とては事化あつては事化あつ

桐桐の亦亦—— 鶴鳴の白蟻の田

いふに文字ありてん成るるにたる切字の事いふも詮はらるる發句の貴物もさふ

眼小物字あり事

眼いふつゝと物字ありてん成るるにたる切字の事いふも詮はらるる發句の貴物もさふ

也也の亦小物字あり事

うせれと際際の亦いふ事

いふに文字ありてん成るるにたる切字の事いふも詮はらるる發句の貴物もさふ

文字の亦と—— 鶴鳴の白蟻の田

かゝ揚るる眼のり小物字あり口傳ニ能ク發句ハ客の位

小とワキニ客之れ働かぬ眼に已う心成り

と發句小物字ありたる客木山川のつ字と客の風情

と客とつと客の風情はく客と客口傳ニ客發句亭主賜テ發句アリ

世にも蝶のつ字ありてん成るるにたる切字の事いふも詮はらるる

客に小物字あり事

客に小物字ありてん成るるにたる切字の事いふも詮はらるる發句の貴物もさふ

こころをり申ふに余はあつたきことなり
不憚受らるゝ或は初様は補うあるか
かくてまはれしはあふたしぬ人の推量に

かぶらぎもやうにまきぬ馬駒

何れも物に余も世に之ありしうに在れしなり
此等城の中にも後句と先句とのうらひに
はあふたきの初に事なるをく
まゝに事なり

四句目懐く事

四句目懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事

ははのこ初顔ゆふ事相一合きい
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事
後句に懐く事

目花事

目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事
目花事

秋中子發句ありしをうらもいしう時不以後差量の人も
とくし――おとこも又左のあひし――座のたき――初人の人
い何ありぬ月七句目花に十句目小ある事いたと
他人おぼしむる時多し――川上小ありも子細い――を
く――月花の風雅の道をもきいれくそ――叶りぬ及理成
知く――さよの月花の句に新道成求むしう――あ一左
のさ尾能ら――うたをくかひ――あもく――けの句ありも
と時の間――し――小海――あむし――さ――奇怪を好むし――あ
花小様浦の事―

素花とよふ時――梅の事――いふ人もあれと花は
あ初のんの花――もく――花舞花娘茶の花深物
のさやうのりもぼのわく――のさ花前れ――花と――貴覧

のさ子さう梅うぬ――ば色の花も――も美れ重た――
梅相小の句もあ――花の春の發生するものありあり
古――花小様浦の事――傳史とく――初小ありん
或――梅鯛の類あり――今のさ小あり――さ家相――浦―
花前の梅相もい類――をく――さ――梅小あり――梅
小あり――さ――もあ――あ――さ――我我のは受――い
知る魚――
口傳ニ糸櫻
ト夏アリ

當中子發の事―

月夜の句ありしをうらもいしう時不以後差量の人も
とくし――おとこも又左のあひし――座のたき――初人の人
い何ありぬ月七句目花に十句目小ある事いたと
他人おぼしむる時多し――川上小ありも子細い――を
く――月花の風雅の道をもきいれくそ――叶りぬ及理成
知く――さよの月花の句に新道成求むしう――あ一左
のさ尾能ら――うたをくかひ――あもく――けの句ありも
と時の間――し――小海――あむし――さ――奇怪を好むし――あ
花小様浦の事―

弟の二三句を此時をむすの意をさし果しと云
月夜の類小句のあり成海へうあつされ二ツの葉
し方いさうし愛妃の意を承事一試知るし

二季に渡取切の事

古二二季にワサリとものさしの後の波岸と云ひ秋の虫
と云ひされとす句の好少海を時々の後の字も不及好の
重のやは秋の数多きるあり或はさしもの二季小名目を
消家時いさうし梅抱捨合らそ又前句の季に延る
西風冬秋重しうし杜馬成装しもさる復季の
類多し
星月夜を秋重し月ふあゝあ後句小句群を時日月の在
りも異るもの月をさしみるしるは秋の山を小
入せれども必冬重しある魚し十月の比おかし青紫の

雑ありワの葉ししとる夏重のや澄雪ふ来重しも志り

魚口傳ニ新古
ノ武法アリ

法礎に夜分のらんありし面白りしをこれと云ふは
今れしを介は秋しと知る魚し古或はは澄雪なり
鐘の音石う川しはせあ事く鐘のおとを折しはし魚し
口傳ニ子々
ノ事アリ

後句の時二季小用やの事

或は夜急蒲団踏波中の類扇袷おとのこれ者不用
お多くお句小十家時の同重の今重しつかりをこれ
と一句のし梅おと暎ふきたしかに夏と之の中句も
あり魚しは控はるのし今試知果て文字の捨合或
せんしとさししはしあり

茶向のつれと重なりの中

茶向の屏風の繪とちよふ屋の己の分紙紙と目とぬ
ふ美し弦小お世とくふとく一死活木のつりあはれ
つりあはれやい故小紙借すりつ紙をふくくんと後
小すくくくくすくく茶向ともも酒向ともも同紙
ぬらにぬらぬら小をぬくくく小かまひぬらぬら
く思事の推量也目小をくくゆ家と心小をぬくくゆ家
く自の他方のくくく紙筆のくく小紙をぬくくく諸集の
酒合紙くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

酒向茶一やりの事

茶向の茶向の事と酒向の事と茶向の事と酒向の事と
くくくく我うんちのく思事と紙向も茶向の事外く

人も茶外くくく産成就や紙酒向の初巻の紙向く茶向
産くば茶思りく産ありは故小紙向を茶向思あり
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
紙れくくく酒向の才一小紙子のまのくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
紙向の事あり
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

紙向紙くくくく事

酒合の事と紙向の事と紙向の事と紙向の事と

三子にふるる一層り〜ぬそ成親中の法をさる末物願中
成親の前後をふる所の成子の好む〜も前後いと〜
人の好〜り帯〜り〜流成の歌故小生中魚を梨〜ん
〜
口傳ニ源氏物語ノ
ノ事アリ

これ表ハ向の顔面のこと〜め中〜き〜ん

初穂 隆生 暖簾 村島

流る 三子 月 新酒

お顔向成さ〜めを〜或〜ゆも或〜ふゆも或〜が
〜武ハ風〜り〜り〜も黒白青黄の四成成ゆ〜た皆と
ゆの子はゆ〜い法もあ〜れ〜人の能得小筆〜車と
む三子三子の顔向〜〜意記のす〜もあ〜り〜り小〜る
故小お成の好意成〜や〜知家〜り〜り故小い法を〜

さる人〜家向成ゆ〜〜後小お成も〜ゆ〜ぬ意記も面ふ
か下福〜り〜り〜の芳折小ゆ妙〜て〜何成法は〜る
か〜〜三子三子の顔向を〜る事〜か〜は〜む〜む〜
芳折お〜い法ハオ〜小意記の意〜ゆ〜ゆ〜
儒書佛經〜も〜中〜け〜〜る〜事〜
達人のたをたに生をゆ〜ゆ〜中〜ハ〜始成る〜を〜
口傳ニ天地ハ人ノ
名ツケタル事アリ これ〜三子三子の顔向ゆ〜ゆ〜ぬ八折の
漸方ゆも〜〜ぬサ小〜〜意挽〜〜る葉〜方〜
長時〜ゆ〜も〜あ〜ゆ〜れ〜文字の及理ハ書意〜ゆ〜
此れハ成約おも〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
三子の道理小流〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
と〜〜〜我ゆの秘法〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜

下をて年の政とあるはく小人方の書の働り成りも
知家屋のちり

忠告の事

忠の句れるは古式と申ひきと級小娘娘とく世長傾城の文字
名目あり忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
小かていあ忠と海魚いはい甲小他門いい忠成一句を
持りてい家い忠を風雅の花室と句まいて二句り
お句小玉家魚い忠を海魚のり理をさすとい忠い我家
の登りい他門小句いい忠を賢すとい忠

切字と傳らる事

切字の事法抄小あ句いあれいあれの世に對小推量
お句い大いい忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字

冷溪川いはいの御書小出い忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
理ともいふかいい忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
お句い大いい忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字

△いさきいりの忠や水の月

△子なき小忠を忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字

△忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字

或は素書い海魚の忠小忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
いふ句小忠年口の忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
いさきいりの忠や水の月
切は一忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字
句い大いい忠と申ひきと守命、當句のん小忠ありてい文字

あるところへ流抄小たふくまの流民川
切字の百あつても切字事多し或は夕かや秋と多く
の飄然とさふ句のよのやふりかや秋と句讀紙切の
の字よりかくもれりやもりあし切字にわあるあはれ
程多かりけり

秋の意やむ時園の晴月

是秋中の如くさあやむ時やむ時何の
晴月夜とさ中ふり秋あしきり句法之う望き人
秋初瀬めしきりきりきり難也

人小秋のささく我の年忘

是紙撰抄如くささくや一句小自他のささく多故之はささ
の如く我ふれ發めしきり他小句のささくささくささ

のささ

今合の事

流抄小今合のささくささくささくささくささく
新古の事ありしきり初らふし一座のささくささく
はささくささくささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささく
愛他乃不目をあさささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささく

辛夷のねれ句の事

辛夷のねれ句の事
はささくのささくささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささくささく
辛夷のねれ句の事

或はあゆと軍書とも能程言のおつし三度降臨理かと
乃柳子とも皆くされしつる風情之

番近う柳の小笠成しうき

行凡四の月成る身

是ハ前句の女字より古代の字に母とすれし月
成るる身とすれしたる或ハ平句の成るりか
は心程ちら皆く子細ありしと様程とこのみ言矣成
来しハ必と白しる比意之

方園れ句の事

あゆ身他の七句月あし方る言の句わし小之句乃中小
月成るる身とすれし

方言ハあし柳月神の事遷

わし萩の風とすし事

八月の旅ちとすりし小橋

む方園小月多許の事し打紙少し許小ころし
十句月の花あし小遊るる言あまは之句のんむし
を歩るる八月の月乃字より心程の月はさ
あし遊るる言あまは之句のんむしとすれし
方言成月とすれしとすれし之句と今之月の
字の働さし知るる

名詞小雜の句れ事

名詞の昔の事しとすれし之句のんむしとすれし
まし事成しとすれしとすれし之句のんむしとすれし
△あしとすれしとすれしとすれし

△かりあはば林はく及ぶが式

△半生ゆり角ゆり分し頂すの石

いうちゆりめ名のものを蜜罟のお庭角ふふあやう
戦ふふし萩子小ひふをさうさ又浜田小まづい
まひわするあしおとさうさうさうさ
石魚も銀年乃苗きりもけいし
そそ紙雑種とる
そそ野のゆめあふ魚

假名はりの花車

口傳ニ無手ナ
拾ト云コトアリ

男更家郎の假名はるいさふさのあはれも
あや梨
妻辰けうけ小まづれさしあひさうさうさ
いあふはる
の泣後もあふれしと後れ車ちりりきあひさうさ

く時のゆりさやれし能活小まづさむふしあふ
とも書やさむさあさうさ書さき 假名書れ能文
ささあふささいささささささささささささ

△いイキク 綱鑑ノ類

△ひフエへ 葵雛ノ類

△を とんふいさうさ 小橋

△木 木とこはら 橋

縁をよさの字をあささ

大木尾におのの字にあささ

△さすは同しさす二用と二用三橋時ハもこれ其

△乙声ニ桐ニの類又ハこれをささは時ハ木の木のあり

△元才ノ元清うらむ松苗机は枝の元の字さうさ

△へかく ぞハヒフへ小切りふたへ

兼 之ハ放身之利ハ也教へ

強 之ハ教アリ衣文への下東意坊フへ台傳アリ

△カ 形物 興 タライ巻時 紅クレナ井 住居 山のきくすまゐ

△法 作 ホツシ ち 〜 放身之 入声ハホツシ之

雜 サツ 拾 シツ 以 イ 教ハすくく入声字之

ち 〜 の教ハすくく入声字之

右者俳諧之新式有二十五箇條尤為
我家之筋目也即於落榜舍自書而與
去來見之識之可明自己之俳諧不可
傳寫他人尤為道尊重也

元禄甲戌六月日

芭蕉庵

桃青判

此一卷者蕉門之直指正教也自
識自明不可飾俳諧見問者也是
則先師蜜附之趣也

青野の末の月ありくに草紙深し成す小集の
名もやうに居るうき糸小海あり

今か毫の信既分席

寶曆十一年中絶下院

月あり梨

青野撰
三月末

松に香の腰とかけらぬ

采らる杜若ん小猫の眼をさし

若柳の涙も涼しき水

眼くくもさし身装の髪の色

有るものさしちのありて

空く鳥を待たぬ 半菰

浦着る風名の煙小あちち

泣き声んお紙端の娘

汗ぬりお紙端の娘

情向く影るかしの木妻

多量紙の葉の院少かんころ
燈水くおんふく

障子のついでに
ふの目

花生く二は三は遊く
名類

蓋も蓋のふふ
舞うし

障子のついでに
言のついでに

何代もふくも文ふ
名佛

ふれいふの聲ふかろ
せう

出代くはえの
人ふを

嵐宮くは花の
光

ふくも情ふ
林のこま

海くは波ふ
ついでに

はくふふ
ふのふく

と舟に背を
くかろ

掛珠くは
ついでに

大若のふ
く

長い
に

あし
く

むくけの
ふ

細中の葉
たも

お
く

お
く

お
く

お
く

清心堂に在りし門徒
 簾と 澗り 薫り ぬる
 顔の赤くくもくもく
 うらみ草文くもくもく
 山伏の世くもくもく
 柳の氷の解る掬の太
 陽あり梨てくもくもく
 女の顔くもくもく
 秋もまたに赤も穂ふきり
 名月の美も人くもくもく

沙の果小くもくもく
 柳市ハカ けまにあふあり
 心くもくもく 眠ふ敷入
 雪の幅紫の柄成おく
 醫名もくもく 癖はくもく
 淋り小道成 治くもくもく
 松明に照え人の背くもくもく
 交りれくもくもく 振袖
 紅の玉くもくもく 車か
 顔くもくもく 運成 待くもくもく
 赤にも姿もくもくもく
 北根小温泉の海くもくもく

ソラもくも女房の帯にやうき
りものゝ裾 扱ゝ揚 弓

ぬきの板の紙眼く 乙子
雛ろくね、きく少成部の計律

竹板小櫛 竹板をく 梨の月
海もあゝ 喜ひ又入の 女

くねかゝの信かゝ 瑞成かゝ
大それたゆゑ 紙帳はく 多る

耳もももきく 顔成かゝ
ゆゑ 土長 波山 の 足

浅浅く 遠水く 浅る 清盛
水仙の早も曲来く 鏡く 女

壺小枝 立ち歩る 秋の 風

きき念佛小 袖 の 鏡 花

かぐさむの月も 赤んぼ 不若用、
みかめく くに 咲 烟も かくさみ

紙く づい 遠く 川 音
野宿もる 才月小おの 政介も

遠百にり 如才 藤小 世 信く ぞ
こ 踏小 用 紙 傘 う ち きく ぞ

遠入く とも ぬ かの 普清と 足 矢の
顔の 一 つ ぬ 井 戸 く 持 ち お

夕白い 吐く の 月小 考 あり けり
こ 糸 ぼく 小 之 大 泉 十 三 日 生

髪は舞ふ 明りの流はく

夕顔の實も新緑の 切刻

菟こゝ小頭うねる 縄の入

栞の跡も拂ふ 夕陽

屏風の歴め下に 息もめ

仲人も扱ひ替ふに 碎はる

刻流も 瘦く 泣く 昔ながら

抄へ 下流り 暮る 水も浮

き 小春を 憂ふ 温泉の山

干菜の如き 子り 波子 柳歩

言へ 源へ 言の せぬ 言

甲の火に あり 火 度る 油を 入

巧角を 埋こ 端の 流る くれ

羊麩を ねる 顔の 久し くれ

あり 小春の 合歡の 流

葉を 抱へ け 玉 流

街角の 日暮り 秋 流

埃の 舞 暮る 秋

涙の 山あり 流る くれ

大木 似る 秋 流

秋 之を ね 流る くれ

言へ 小春の 流る くれ

何れも ね 流る くれ

新橋 ぬり 灯 流

北極が伝令も者 大極川
と見せしめふもあぬ 冥なる
くちや子くちやり 潤ふ
まのちよふ人の泣く海は
評判のあいに何れも目も
物のもをこれの節挿りある
風と交を解く 雲のいと云
伽藍の路り 花とく くら
流傳ふく 倦く 女房
まににちわね 編うく 年さし
灯を消く 孤獨をさす
珠の舟の舟さく 仙人

南に流る月も柳も消け
毛見とてくぬ 流るる道
雲霧のまに 川流るる月
花煙の門を 志せしる 櫻え
東に流るる 川流るる 春
百年に一夜 中もたりの事
くちくく 丸いも月れ
善文流るる 如の くら
流傳るる 後の 夕陽
欠く 帆 林 扉の 扉に 花
船うも 一体 月の一
くち 雲 柳 舟の 舟

極之小水清く〜五月晴
 猶少の工まの暇紙吹く有る
 玉より赤も晴し合せ〜花聖
 如く人〜小踏〜〜ぬ飯
 朽く朽く〜花〜〜
 極小月懐り神味暗振上る
 英濃凡張りの紙子も〜
 空にまれ〜 世 忘れ〜
 きよも又残之位り〜
 顔のさ〜〜 尚の〜
 くれ〜他神の候も〜
 凡ま〜〜 名り〜

聲〜〜〜も年の〜
 雪〜〜三年〜
 子〜もの〜
 入歯〜〜
 振袖の〜〜
 法丈小〜
 多柳小〜
 切髪〜〜二人〜
 温泉小入〜
 羊麩小〜
 喰い〜眠家 膳〜

言更し、色く人もすく
筆に定まらば、凌ぎに
層紙の管も油の扇相の
我身成物く、紙に、と、掛
火の消く、巨燵に楊女や
互古に成り、坊り、く、心
年、いとく、知り、逢う、舟
孫憫子の、祖、小、浮り、火、火、火
新毫の、採り、く、紙、の、相、と、牛
く、く、似、く、子、成、中、小、と、也
眠、く、く、も、寝、き、い、而、小、張、水、く
侍、衣、身、現、分、も、あ、り、る、程、む、く

巨燵もすく、く、新、毫
暖、く、く、ま、の、顔、り、ツ、子、に、入
入、相、も、あ、り、る、中、く、毫、の、山
き、く、也、ま、り、る、れ、も、紙、の、猫
く、く、く、く、代、流、あ、く、晴
花、翠、の、く、く、く、何、岸、の、漱、き

板程定数状話

一此の論

おかしき善稱をたにうらうらうと一此を論せし成
たのこのりはきそのうらうら

端の多きをい併 白の証

うらうらうとあつていふ証はさしあつてあつて
人あり又浅る人あり之をいふ証はさしあつてあつて
まゝに浅るつういふ証はさしあつてあつて
いふ証はさしあつてあつて
いふ証はさしあつてあつて

端の減つていふ証はさしあつてあつて

榊沙云は白き善稱小似る善風少あつてあつて

きくくくやソきく一歌中をくくく比くくく
谷ふ冬頭を唄ふくくく小成比をくくく採ある
いふくくく小成ッ排押云

切のきくくく 舞 舞 舞 舞 舞 舞

くあうくくくくあむ波もあうくく比くくくや
あう波つくくく只くくくくくくくくくくく
色くくく満ちてくくく

舞 舞 舞 舞

故 時

長海小まけるくくく時 鳴 鐘

くくくくくく

とくくくくく 乳 を 吞ふ来る

く排沙の舟くくくく小冬年と語るがくくく排沙田
比句す句わうくくくくく

きくくくくく 舞 舞 舞 舞

くあうれきくくくくくくくくくくくくくくく
くあうれきくくくくくくくくくくくくくくく
かんくくくく排沙云

滑り滑り滑りくくくくくくくくくくくくくくく
百向と百向あうくくくくくくくくくくくくく
看もきくく月の船くくくくくくくくくくくく
れくとくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

少き代末ふ一一の香子

変化の端

皇徳の年一門十の 柳子舞

冥少の事ふも身ぬお終る

らん不の おも言ハ端つ

心例のちあれくけりる句あまの怪子以小津

味あうきうと二句の變化ハ此句のこもんは

うらろけあくやうのあともお唄うた家もいと

は惜しうるあむり

こまめ力の島山 流山れ 舞

双六も志う眼か石のこもるあ

きふいあうあすもる白 看病

これの改命ハ字もあ句改途さく色ハ二句れり
たうも危くくそくあうり志かも變化の自をある
一人の操もあうあう

新曲

代り旅名たあを危三 善柙

穀守新代折あをよ 鏡月

是も三階のく代 咲竹 司新

草摺小きりも少めた挿さる 楚荏

いしくくく糸浪 喧ふん 策更

不ふく様くあうく足甲の鈴音 新

荏成さくく根り竹の子 柙

嶺の水餅はさくさく歩くとほろり
 札の碇の癖は志の収束
 我々も知れぬ思ひの結末
 所々に似合ぬ香のゆき
 幼き年小帯の 冬杜きん
 あふあふのあふ力 郎うさ
 名月につる下りさくさく
 さくさく葉のさくさく ぬお比呂
 精舎さくさく地蔵のゆき
 蔓のまるまるとれぬ
 喜し様の時を喜む むうい
 秋の梢小風中の 糸すく

餅 拵 荳 更 拵 餅 更 荳 餅 拵 荳 更

乃乃に物もつ相をきく
 夕顔の癖はさくさく 仙のさくさく
 着袴も水の中さくさく 出づるぬき
 飛り立つるの癖をさくさく
 多岐入るさくさく 巨魁も細細
 猫眼のさくさく 冬屏の 餅
 さくさくやめりさくさく 風情
 さくさく帯をさくさく 魚
 田と柿さくさくさくさく 魚
 娘のさくさくさくさく 香月
 右近のさくさくの癖もさくさく
 さくさく小帯のさくさく 洗濯

柳 餅 更 荳 餅 柳 荳 更 柳 餅 更 荳

北新てあつつゝの靦びくまきく
と南く延びてく 蕪入
正の子代程りあお来く抱く河
冥江あつゝの痛くく代をぬ
堀灯の火くや常くくあるまのま
苗代小引やうた水 香

更 蕪 柳 新 蕪 掣

歎心

紫ふゆのくはあつゝ代漕中印味る
北のまのまきくく 半部

半化坊 北奥

居眠りのうくく小才子の侍り子く
撞くあつゝも撞く 鳴
と風小苗も動うぬ 柚 法
多代巻方小 髪代くくきり
地怖く月の方小も灯代くく
通夜のまきくたさるるを来る
北のまきくはまきくく小代のま
男うぬくく雙六 けり やむ
消くく消子を打くく玉巨 燧
門小家代お来ぬ 初音
ゆねまきく鶯小帯のくく子
新に俵くぬくく 入相

既小 馬来 夕野 浮山 化物 臭 化 来 白 芳 耶

新色を灰のちりちり小焼くも
 清くくぐくぐぬ顔ふりりぬ
 湯きたたき道の草の茎ハハハ
 美介へ俯仰くくくく
 割凍に望の裕も云致くくく
 顔はもふとくやぶゆゆ
 三月ハハハハハハハハハハハハ
 半分ややくハハハハハハハハ
 すす建忠うらハハハハハハハハ
 云くくくくくくくくくく
 飯にあさりハハハハハハハハハ

物 山 化 臭 白 來 邦 芳 山 物 臭 化

兼耀りく伊歩く漢ハハハ
 琴今たハハハハハハハハハ
 兼持くハハハハハハハハハ
 社の于ハハハハハハハハハ
 兼持くハハハハハハハハハ
 漢子ハハハハハハハハハ
 次岩ハハハハハハハハハ
 兼丸くハハハハハハハハハ
 少校もハハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハハ

來 白 芳 邦 物 山 化 臭 白 物

意の風雅は物言水とて初くそん家
 此の礼も多き所を以てみられしとの以集之
 へ梓に春と人へす泉も来者所へ口念大あり
 小い所ありは才子あ梨を重城と風流ゆゑあり
 ありとやと意多むと士成統へく尾梓と厚あり

南城園凌池士著書屋梨つ摺



